

旧約単篇 列王記の福音

サマリア王朝の終焉

列王記下 17 章（朗読：1-6）

サマリア王朝の最後です。A.D.722 年。これは列王記と歴代誌に載っているだけでなく、アッシリア王朝の記録にも残っています。サルゴン二世の年代記に、「私はサマリアを包囲して、これを征服し、その住民二万七千二百九十人を捕虜として連れ去った」と書いてあるのです。列王記によるとサルゴンではなくて、サルゴンのすぐ前のシャルマナサルということになっております。何故違うのかと言いますと、これはアッシリアの楔形文字の文献によるのですが、シャルマネサルはサマリア包囲攻撃の間に急死したと伝えられます。とすればやはり、王朝の年代記としてはサルゴン二世の功績として記録されたのでしょう。

住民を連れ去るのは、ソ連軍もやりましたけれど、アッシリアのはもっと徹底していて、指導階級の貴族や技術者や有能な人材を一人もいなくなるようにした。これは、そういう人材を残しておけば、いつ国や町を再建するか分かりませんから、後顧の憂いを断ったのですね。しかも、被征服地の住民を入れ換えたりしています。つまり、大東と交野を征服して、大東の指導階級を交野に強制移住、反対に交野の人間でまともなのは大東に移してしまう。毒にも薬にもなりそうにない無力な者は残しておく。もっとも、こんなに近ければ、お互いまたゾロゾロ元の町へ戻ってまた入れ代わるでしょうが、古代のことです。それも何千キロも離れた異民族同志を入れ換えた。これはこの後、24 節にも出てきます。

こうしてソロモンの死後 200 年で、サマリアを中心とする北王国が地上から消えます。更に次回に読みますように、200 年経たぬうちに、南のエルサレム王朝の灯も消えて、イスラエル人はついに国を失うのです。今日の 17

章はサマリア滅亡の次第を記します。

1. イスラエル最後の王ホシェア。

メソポタミアから押し迫る圧倒的な勢力の前に、滅亡は時間の問題だったと思いますが、王は最後のあがきにも似た策を弄します。預言者ホセアはこの間の事情を、「エフライムは鳩のようだ。愚かで悟りがない。エジプトに助けを求め、あるいは、アッシリアに頼って行く」（7：11）とっていますが、その通りのことがこの17章にも出ています。

1. ユダの王アハズの治世第十二年に、エラの子ホシェアがサマリアでイスラエルの王となり、九年間王位にあった。2. 彼は主の目に悪とされることを行ったが、彼以前のイスラエルの王たちほどではなかった。3. アッシリアの王シャルマナサルが攻め上って来たとき、ホシェアは彼に服従して、貢ぎ物を納めた。4. しかし、アッシリアの王は、ホシェアが謀反を企てて、エジプトの王ソに使節を派遣し、アッシリアの王に年ごとの貢ぎ物を納めなくなったのを知るに至り、彼を捕らえて牢につないだ。5. アッシリアの王はこの国のすべての地に攻め上って来た。彼はサマリアに攻め上って来て、三年間これを包囲し、6. ホシェアの治世第九年にサマリアを占領した。彼はイスラエル人を捕らえてアッシリアに連れて行き、ヘラ、ハボル、ゴザン川、メディアの町々に住ませた。

ホシェアは多分、エジプトが援軍を遣さないと見て、アッシリア王に和睦を申し込みに出向いて、捕まったのでしょう。4節終わりの「彼を捕らえて牢につないだ」がそれを暗示します。国王を人質に取られたままで三年間…これは足掛けでしょうから、一年あまりとみても、小国イスラエルの都が、当時の世界勢力の前に、よくこれだけ持ちこたえたものです。もっとも、最後は悲惨な結果に終わります。時、西暦 B.C.722 年です。

つぎの7節から後は、イスラエルの滅亡の真の原因は罪にあったという鋭い指摘です。主に対して罪を犯し、偶像に仕えたからである……と列王記の編者は信仰の立場から問題の根をえぐります。

7. こうなったのは、イスラエルの人々が、彼らをエジプトの地から導き上り、エジプトの王ファラオの支配から解放した彼らの神、主に対して罪を犯し、他の神々を畏れ敬い、8. 主がイスラエルの人々の前から追い払われた諸国の民の風習と、イスラエルの王たちが作った風習に従って歩んだからである。9. イスラエルの人々は、自分たちの神、主に対して正しくないことをひそかに行い、見張りの塔から砦の町に至るまで、すべての町に聖なる高台を建て、10. どの小高い丘にも、どの茂った木の下にも、石柱やアシェラ像を立て、11. 主が彼らの前から移された諸国の民と同じように、すべての聖なる高台で香をたき、悪を行って主の怒りを招いた。12. 主が、「このようなことをしてはならない」と言っておられたのに、彼らは偶像に仕えたのである。13. 主はそのすべての預言者、すべての先見者を通して、イスラエルにもユダにもこう警告されていた。「あなたたちは悪の道を離れて立ち帰らなければならない。わたしがあなたたちの先祖に授け、またわたしの僕である預言者たちを通してあなたたちに伝えたすべての律法に従って、わたしの戒めと掟を守らなければならない。」

14. しかし彼らは聞き従うことなく、自分たちの神、主を信じようとしなかった先祖たちと同じように、かたくなであった。15. 彼らは主の掟と、主が先祖たちと結ばれた契約と、彼らに与えられた定めを拒み、空しいものの後を追って自らも空しくなり、主が同じようにふるまってはならないと命じられたのに、その周囲の諸国の民に倣って歩んだ。16. 彼らは自分たちの神、主の戒めをことごとく捨て、鑄像、二頭の子牛像を造り、アシェラ像を造り、天の万象にひれ伏し、バアルに仕えた。

14節は多分、エジプトを出て荒れ野を旅する途中、モーセに反抗して、神への不信を暴露した先祖たちの生き写しだと、言っているのです。ここの表

現で面白いのは「先祖たちと同じように“かたくなで”あった」と訳している所の言い方です。ヘブライ語では **אִשְׁמְרָתֵנוּ יִקְרָא** は「首筋が突っ張った状態になった」とでも言いましょうか。神の前に従順になれず、強情に反抗することを言った描写です。新改訳の「うなじのこわい者となった」が一番直訳調で原文の感じを出しています。文語的で古いですが……。ちなみに古代ギリシャ語訳 (LXX) は **ἐσκληρύναν τὸν νῶτον αὐτῶν** 「背中を硬直させた」と訳しています。生ける神の前に謙虚に頭を垂れて、人間としての本当の尊厳を持つか……。それとも背中を突っ張らせて、フンゾリ返って空虚なものとして死に果てるか？ これは今も変わらない、人間の根本問題ですが、イスラエルの人たちにとっては特に、神に選ばれて聖なる使命を与えられていたのですから、それだけ厳しく裁かれます。

この後、18 節では、南のユダもイスラエルと変わらなかったことが語られます。今はそこは飛ばして 23 節へ。

23. 主はついにその僕であるすべての預言者を通してお告げになっていたとおり、イスラエルを御前から退けられた。イスラエルはその土地からアッシリアに移され、今日に至っている。

この列王記が書かれた時点でこうだったのでしょう。

2. ゴーストタウンになったサマリアへの処置。

先程述べた「住民入れ換え」政策をアッシリアは強引にやるのです。24 節からですが、この五つの町は、サマリアと同じ運命に遭って、同じようにアッシリア軍に征服された町です。いずれもメソポタミアの町であろうとされます。この人たちもやはり、強制的に移されて来た人たちです。アッシリアの本国から自国民の移民を連れて来た訳ではありません。故郷から引き離されて、それぞれの宗教と習慣をこの、地の果てみたいなサマリアへ持って来

たのですね。アッシリアの王は、この人たちを土地に根付かせるために以前のイスラエルの宗教を利用しようとするのですが、その前に語られるエピソードは多分、住民が殆どいなくなって、耕地や森林も手入れする人がなくての放置されたために、野獣が跳梁しだしたのでしょう。

24. アッシリアの王はバビロン、クト、アワ、ハマト、セファルワイムの人々を連れて来て、イスラエルの人々に代えてサマリアの住民とした。この人々がサマリアを占拠し、その町々に住むことになった。25. 彼らはそこに住み始めたころ、主を畏れ敬う者ではなかったもので、主は彼らの中に獅子を送り込まれ、獅子は彼らの何人かを殺した。26. 彼らはアッシリアの王にこう告げた。「あなたがサマリアの町々に移り住ませた諸国の民は、この地の神の掟を知りません。彼らがこの地の神の掟を知らないので、神は彼らの中に獅子を送り込み、獅子は彼らを殺しています。」27. アッシリアの王は命じた。「お前たちが連れ去った祭司の一人をそこに行かせよ。その祭司がそこに行って住み、その地の神の掟を教えさせよ。」28. こうして、サマリアから連れ去られた祭司が一人戻って来てベテルに住み、どのように主を畏れ敬わなければならないかを教えた。29. しかし、諸国の民はそれぞれ自分の神を造り、サマリア人の築いた聖なる高台の家に安置した。諸国の民はそれぞれ自分たちの住む町でそのように行った。30. バビロンの人々はスコト・ベノトの神を造り、クトの人々はネレガルの神を造り、ハマトの人々はアシマの神を造り、31. アワ人はニブハズとタルタクの神を造り、セファルワイム人は子供を火に投じて、セファルワイムの神々アドラメレクとアナメレクにささげた。32. 彼らは主を畏れ敬ったが、自分たちの中から聖なる高台の祭司たちを立て、その祭司たちが聖なる高台の家で彼らのために勤めを果たした。33. このように彼らは主を畏れ敬うとともに、移される前にいた国々の風習に従って自分たちの神々にも仕えた。

34. 彼らは今日に至るまで以前からの風習に従って行い、主を畏れ敬うことなく、主がイスラエルという名をお付けになったヤコブの子孫に授けられた掟、法、律法、戒めに従って行うこともない。

占領政策、宣撫政策……と言うと古いですか。住民を穏やかに統治するための方便としてのユダヤ教ですね。そのために旧サマリアの祭司職をわざわざ、御用祭司として一人だけ呼び戻した訳です……バビロンから。元々子牛礼拝やら高台も含んで「清濁併せ飲む」ような宗教家をアッシリア帝国の囑託みたいにして、宗教活動をやらせたのです。それプラスですよ……移住して来た異民族が持ち込んだ偶像です。これらを混ぜ合わせたものが、サマリアの宗教文化を作って行きました。指導者を奪われて、荒れ果てた国土に残された庶民と、これも不幸な強制移住者たちとが共存したのです。まあ、サルゴン二世年代記の表現によれば、「私は彼らを互いに混ぜ合わせた」と言うのですけれど……。

最後の 34 節は、もちろん、生き残ったエルサレムの立場から書かれていますから、北に対して批判的で厳しいのは当たり前ですが、それにしてもです。これだけ偶像と異教の風習を黙認した上で、アッシリア政府公認の宗教として「主なるヤハヴェ」の礼拝をやらせてもらったと言うのです。ユダヤ人のサマリア人蔑視と憎しみの根は、こんな所から発しています。

3. 後日談と感想。

アッシリアへ連れて行かれたイスラエルの三万人程の人がどうなったかは謎のままです。140 年後にネブカドネツアルによってバビロニアへ連れて行かれたエルサレムの住民は、この時から 200 年後に、ペルシャ王の命令で帰って来て、エルサレムの神殿を再建するのですが（エズラ記・ネヘミヤ記）、北の指導者階級が帰った記録はありません。その後のエルサレムとサマリアの違いは結局、しっかりした信仰の指導者がいた社会と、それが全くいなかった社会の違いです。イエスが来られた時のこの国は、墮落して形骸化したとはいえ、パリサイ人や律法学者に教えられて少なくともモーセや預言者たちの精神を受け継いでいました。サマリア人の方はどうなったかと言いますと、エルサレム神殿の再建に加わることを拒否されて以来、シケムのゲリジ

ム山に聖所を作って、少数者の特殊な社会を作っていました。（ヨハネ 4 章）

今日、日本のアイヌに比べられるような、滅亡寸前の社会がイスラエル国内にあります。サマリア人社会です。1980 年の資料では全部で 450 人と書いてありますが、アイヌはどれくらいでしょうね。エジプトのカイロやシリアのダマスコにもごく少数のサマリア人居住区があったと言いますが、今はどうなっておりますか……分かりません。イスラエルでは、昔のシケムに当たるナブルスに 200 人、テルアビーブの近くのホロンに 100 人の集落があって彼ら独特の宗教と風習を維持しながら、閉鎖された社会を作っています。生きた博物館だとよく言われます。

このサマリア人とサマリア教ですが……。結局どんな形になって残ったと思いますか？ 列王記を読んだ者の想像としては、生ける聖なる神ヤハヴェの信仰とは、おおよそ似ても似つかぬ混合宗教、迷信宗教になり果てたろうと思うのですが、これが予想に反して非常に保守的な、モーセの五書だけの宗教で、過越の祭りなども守って、その代わりエルサレムの宗教は墮落したものとして認めないのですね。それに預言者の書や詩篇などは神の言葉として認めない。この写真にはサマリア教の祭司と律法の書の巻物が出ております。創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記の五書です。この律法の書は、明らかに書き換えたと思われる箇所もあります。例えば申命記に「エバル山に祭壇を築け」という所が「ゲリジム山に」となっているのを除くと、サマリア人の聖書は事実上ユダヤ人の聖書と変わらないのです。違うところは日本語で言うなら「仮名遣い」が違っていると言いますか、スペルの書き方の違いがその殆どです。それと発音が訛っていて、フランス人が英語を読んだような感じになります。h なんか発音しないのですね。たとえば…
 … Barashet bara eluwem it ashamemwit aarets. ヘブライ語を学んだ人が聞くと「あっ、訛ってる」と感じる訳です。そして、この写真にもありますように、過越を祝って小羊を屠るのですね。

あれだけ混合宗教、混血文化を作りそうだった列王記のサマリア人はどうなったか？ アワ人の神ニブハズとタルタクはどこへ行ったのか？ バビロン人の神スコト・ベノトはどこに消えたのか？ でもそれが本当に消滅して、生ける主なる神だけがサマリア人のバックボーンになって残ったのです。異民族の持って来た偶像神は、果たして聖なる大きな力に吸収されてしまったのか……。北王国の民の血が、移住者の血を薄めて消してしまったものか……。すべては謎に包まれていますし、これは文化人類学者や宗教学者の課題になるのでしょうか。100年以上もバビロンの偶像の中に置かれながら、信仰を持って生きて帰って来たエルサレムの人たちが持っていた命の力が、サマリアの偶像には無かったのです。

聖書とイエス・キリストだけを力にして、日本という、遠藤氏の言葉で言えば「沼」の中に浸けられている私たちが、どのような形で残るのか……すべては生ける神の命と本当につながるか否かで決まるのですね。真剣に考えて祈るべきことだと思います。

それにしても悲しいのは、これだけ聖書に忠実に、先祖の伝統を大切にしようとしたユダヤ人と、サマリア人とが、ついに愛し合えずに憎しみ合ったことですが……。これには次に神の独り子イエス・キリストが来て、その罪を引き受けて、清めて下さるほかはなかったのです。どんなに純粹に神を信じて、聖書を守っても愛し合えない人間の悲しさですが、イエス・キリストだけがその人間の希望であることを、今さらのように実感します。

(1989/03/12, 交野)

《研究者のための注》

1. 北王国イスラエルが、主に反逆して空しい偶像の後を追ったために、主が彼らを御前から退けた(13-18)という直接の罪の指摘の外に、21-23の言葉は、それが、ネバトの子ヤロブアムの罪の故に「すべての預言者を通してお告げになっていた」ことの成就でもあることを確認しています。

2. 列王記 13 章でヤロブアムに対して神の裁きを宣言した預言者については、88 年 2 月大阪聖書学院でのスピーチ「神の人の最後」があります。